第３課　旧約聖書における正義と憐み（その１）

【暗唱聖句】

「虐げられている人のために裁きをし、飢えている人にパンをお与えになる。主は捕われ人を解き放ち、主は見えない人の目を開き、主はうずくまっている人を起こされる。主は従う人を愛し、主は寄留の民を守り、みなしごとやもめを励まされる。しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる」詩編146:7～9

【今週のテーマ】

【日曜日　正義と憐みー神の民の特徴】

社会正義とは、人々の基本的な必要が満たされ、生き生きと生活でき、平和がいきわたっている世界が実現されることであり、それは神様の御心、また律法に合致しています。

「もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、彼に対して高利貸しのようになってはならない。彼から利子を取ってはならない」出エジプト22:24

「ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である」レビ19:10

聖書は貧しい人を利用して儲けようなどと考えてはならないと教えています。生活保護受給者からその生活保護費を搾取する犯罪や、お金がなくて困っている人に無理やり高利で貸しつける闇金などはまさにこの類と言えるでしょうし、わたしたちも貧しい人から何か得になるものを得ようと思うべきではありません。またぶどう畑からすべてを収穫しつくさないで、貧しい者や寄留者のために残してくように言われています。弱者に対してわたしたちがどのように接するのかを主は見ておられます。しかも、それはわたしにしたのと同じであると言われるほど、弱者に主は目をとめておられることを忘れてはなりません。

『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』マタイ25:40

「弱者を虐げる者は造り主をあざける。造り主を尊ぶ人は乏しい人を憐れむ」箴言14:31

しかし、「弱い人を訴訟において曲げてかばってはならない」（出エジプト23:3）とあるように、

弱者を憐れむのは、決して正義を曲げてまでということではありません。

安息日に関する教えでも、奴隷や寄留人、家畜までも休むようにと教えているのは興味深いことで、すべての人が平等に安息に入ることを主は望んでおられます。さらに7年ごとに主は安息年を設け、負債が帳消しになったり、畑に種をまいてはならないと言われました。つまり、奴隷は強制労働から解放されるわけです。安息年をヘブル語でシェミッターといいますが、これは「（負債の）恩赦」を意味する言葉でう。

「モーセは彼らに命じて言った。「七年目の終わり、つまり負債免除の年の定めの時…」申命記31:10

「七年目には全き安息を土地に与えねばならない。これは主のための安息である。畑に種を蒔いてはならない。ぶどう畑の手入れをしてはならない」レビ25:4

そしてさらに主は50年に1度、奴隷から解放される日を定められました。

「あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。あなたたちはおのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る」レビ25:8～10

【月曜日　普遍的な関心】

「天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された」創世記2:1～3

第七日目安息日は変わることのない普遍的な教えです。またそれは創造の記念日、すなわち私たちは神様によって創造されたことを覚え、礼拝を捧げる日として今もなお大切なものです。安息というヘブル語シャバットは、本来休息する、安息するという意味ではなく、今までしていた活動をストップする、遮断するという意味の言葉です。天地創造の業は6日目に人間が創造されたところで終わり、神様は7日目には創造の働きをシャバット、ストップされたわけです。しかし、このシャバットすることによって、天地万物は完成されたと言われているのは興味深いことです。物事はすべて神の安息に入って初めて完成を見るということです。この第七日目安息日はその後、十戒の第4条の教えとなり、わたしたちも守るように言われました。すなわち、第七日目を聖別して、6日間の日々の仕事をストップして、神様に目を向ける日とするように教えられています。これは、この安息日を抜きに、私たちは神の子として完成されないということなのです。

そして、この安息日の教えは発展して、安息の年やヨベルの年が生まれます。ただ現在はこの安息の年やヨベルの年は守られていません。それは「やがて来るもの（イエス）影」である儀礼的な安息年であり、イエスの十字架によって終了したからです。しかしその精神は今も残っています。貧しいもの、弱いものを常に考えていく心は、今もなお大切な教えとして残っています。

【火曜日　預言の声その1】

「あなたの口を開いて弁護せよ。ものを言えない人を犠牲になっている人の訴えを。あなたの口を開いて正しく裁け、貧しく乏しい人の訴えを」箴言３１：８，９

現代社会においても、弱者の意見がないがしろにされてしまいがちです。ものが言いたくても言えない人や貧しい人の訴えに対して無視してはなりません。むしろ積極的に耳を傾け、彼らを弁護し、その声を聴いて、正しく判断することを主は求めておられます。

「むなしい献げ物を再び持って来るな。香の煙はわたしの忌み嫌うもの。新月祭、安息日、祝祭など災いを伴う集いにわたしは耐ええない。お前たちの新月祭や、定められた日の祭りをわたしは憎んでやまない。それはわたしにとって、重荷でしかない。それを担うのに疲れ果てた。お前たちが手を広げて祈っても、わたしは目を覆う。どれほど祈りを繰り返しても、決して聞かない。お前たちの血にまみれた手を洗って、清くせよ。悪い行いをわたしの目の前から取り除け。悪を行うことをやめ、善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ」イザヤ1:13～17

どれほど信仰深い姿で礼拝を捧げていたとしても、陰で悪を行っていたり、弱者に対して憐みをかけることがないならば、主はそのものの捧げものを見ない、祈りを聞かないと言われます。神様は自分を礼拝することよりも、そのような正しい行為、愛の行為をわたしたちに求めておられるということです。

【水曜日　預言の声　２】

「58:4 見よ／お前たちは断食しながら争いといさかいを起こし／神に逆らって、こぶしを振るう。お前たちが今しているような断食によっては／お前たちの声が天で聞かれることはない。58:5 そのようなものがわたしの選ぶ断食／苦行の日であろうか。葦のように頭を垂れ、粗布を敷き、灰をまくこと／それを、お前は断食と呼び／主に喜ばれる日と呼ぶのか。58:6 わたしの選ぶ断食とはこれではないか。悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて／虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。58:7 更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え／さまよう貧しい人を家に招き入れ／裸の人に会えば衣を着せかけ／同胞に助けを惜しまないこと。58:8 そうすれば、あなたの光は曙のように射し出で／あなたの傷は速やかにいやされる。あなたの正義があなたを先導し／主の栄光があなたのしんがりを守る」　イザヤ58：4～8

どれほど苦しい断食をしたとしても、その横で人と争ったり、神様に逆らった行為をしているとすれば、その断食には何の意味もありません。神様が求める断食とは、悪を離れ、弱者に救いの手を差し伸べ、同胞を助けてあげることだと言います。断食は食を断つという行為そのものが重要なのではありません。食を断つことを通して、身も心も砕かれて、自分のことを忘れて、神と人を思うことが大切なのです。また、そうすれば祝福となって自分にかえってきます。

【木曜日　善のための力】

聖書の中に見る、神の民たちは宗教上の形式や習慣に熱心でしたが、信仰を実際に適用することが苦手でした。それは今日のわたしたちも同様かもしれません。

「善を行うことを学び／裁きをどこまでも実行して／搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り／やもめの訴えを弁護せよ。」イザヤ1:17

聖書は積極的な行動を促しています。正しい信仰にはそれにかなった行為が伴うのです。

「あなたがたのだれかが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい」と言うだけで、体に必要なものを何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」ヤコブ2:16，17

わたしたちは信仰によって救われます。それは誰一人として救われるに値する行いを行うことができないからです。しかし、これは行いは全く関係がないということではありません。なぜならば、信仰には行いが伴うものだからです。それぞれの信仰にふさわしい行為が信仰の実として現れ、またその行いがその人の信仰をさらに育み、成長させる仕組みになっているのです。

【金曜日】　さらなる研究